

東本願寺へ参拝すると、まず大きな二層の門（御影堂門）があります。その両側に塀があつて、向かつて左側には「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」と、大きく掲示されています。「見つけよう」ということですから、私たちには「生まれた意義」も「生きる喜び」もあるのに、それを自分の実感としてもつことができず、何かしら手応えの薄い安心できない人生を送っていないかと問われているようです。「生まれた意義」ですから、あなたが人間として、そしてあなたに生まれたそのこと自体に意義があるということですよ。

私たちが生きている現代社会は、あらゆる場面で成果が要求され、その成果によつて人間が価値付けされていく傾向をもっています。人間の価値や生きている意味を、「何ができるか、何をしたか」という機能的側面のみで見えていく社会になってしまい、人間は、生きるいのちそのものとしての価値や意義を見失つて、経済発展に資する材料としての「人材」になってしまいました。いつの間にか、人間に生まれた者が、機能やその成果、またその結果としての所有や地位でしか見られなくなり、どんな境遇であつても私が私としてそのまま丸ごと認められるということが困難になっていないでしょうか。人間はいずれ機能が低下していきます。少々機能が衰えたくらいで人間の尊さは一欠片も損なわれていないはずなのに、それは否定的にしかとらえられず、自信を失い自分を卑下しがちです。誰からも必要とされていない、誰も自分の存在を認めてくれない、自分で生きている意味が感じられないのは、人間にとつて最も寂しい辛いことではないでしょうか。

どちらができるか成果を上げるか、あらゆる分野で競争です。「人間」はますます「人材」になり、必要な期間のみ必要な機能に対価が払われます。流動的な部品として、瞬間の関係が結ばれます。それは、大切な関係にある人を見るときの眼も変えてしまい、どんなに身近な人をも自分の都合からしか見ることができなくなつてしまいます。大人の都合に合う成果（数値や比較上の位置）を出している間は認めるけれど、期待に反する成果を見て存在を否定するかのような大人の言動にふれると、子どもたちは大きく傷つき、深い怒りや憎しみさえもつようになります。またコミュニケーションを閉じてしまつたり、自他に攻撃が向かうことにもなります。私たちが無自覚にディスカウントメッセージ（相手の価値を下げたり、存在を否定するような言動）を発していないか、振り返つてみなければなりません。けなす、冷笑する、目を逸らす、無視する、陰口を言う、仲間はずれにする、無関心などです。相手と話している最中に携帯メールをチェックしたり、時計ばかり見るのもがっかりさせますね。

少なくとも、家庭や学校はそうであつてはなりません。親や教師の都合で子どもや生徒を見てしまいがちですが、どの子も尊いいのちを生きている子です。そういう根本のところで、存在そのものを無条件に丸ごと認めた上で、尊いいのちをいきるあなたの具体的生活・学校生活はそれでいいのかと問うのです。相手の存在を認めた上で、叱ることも注意することも、時には反対することも大事です。それが感じられれば、叱られても受け入れられるでしょう。そして、尊いからこそ、与えられた環境条件の中で、自身の能力資質を開花させることを惜しんではなりません。親や教師は、その子自身が気づいていない能力までもを見出し、刺激を与えて、意欲を喚起して存分に伸ばす支援をしなければなりません。つまり、可能性（できる）を広げることが大切で、それには、生徒のやる気に火をつけるのが一番です。その時、少々努力や我慢が必要でも、そこに喜びも湧いてくるのではないのでしょうか。

今日、あらゆる場面で「できる」を競う私たちが、人間として、この私として生まれて、今ここに生きていることが、そのまま尊重され大事にされる場が、家庭であり学校です。無量不可思議のいのちの尊さを実感し共有し、つながりの中にある自己を喜び感謝しつつ、安心してできることを尽くしていける、そういう場であり続けたいものです。